鉄砲洲神社　論語素読　解説

（平成 22 年 1 月 22 日）

八佾第三

20　子曰く、関雎は楽しめども淫せず、哀しめども傷らず。

関雎は音楽です。詩経の中の一篇です。

孔子が言いました。

音楽をじっくり楽しんで聞くけれども、楽しみすぎてしまって正しさを失うようなことはしない。哀しさにくじけそうになっても、悲しみすぎてしまってその場の和を害するようなことはしない。

鳩山首相ご夫妻は、自分達の楽しみに色々な所へ出かけているようです。自分だけが楽しむのは結構ですが、少し溺れかかっているのではなかろうか。分からないように行けばよいのですが、批判する声がちらちら聞こえてくる氣が致します。

「楽しめども淫せず」のところは、タイガー・ウッズを思い浮かべました。完璧な人間という世間の評価が出ていたにもかかわらず、女性が好きだった。女性に溺れて楽しみ過ぎて淫してしまった。正しさを失うほど溺れない方がよいと捉えると良いでしょう。

21　哀公 社を宰我に問う。宰我 対えて曰く、夏后氏は 松 を以てし、殷人は柏を以てし、 周 人は栗を以てす。民をして戦栗せしむと。子 之を聞きて曰く、成事は説かず。遂事は諫めず。既往は咎めずと。

社とは、その土地の神様（神木）です。

哀公が神木について宰我に聞きました。

宰我が答えました。

「夏の時代は松を神木とし、殷の時代は柏を神木とし、周の時代は栗を神木にしました。民衆を怖がらせるために栗にしたのです」

孔子がそれを聞いて、

「成就した事柄については論評しない方がよい。終わってしまったことは諫めてはいけ

ない。すべて過ぎ去ったことの責任は追及しないことだ」と、言い過ぎだと諌めています。

「民をして戦栗せしむ」の部分は、定公の時代に季氏の執事陽虎がクーデターを起こし、季桓子をとらえ全権掌握し、定公と三家に対して、これからは自分が実権を握ったのだから言う事を聞くようにと誓わせました。目上に当たる人達には周社で誓わせ、民衆には殷社で認めさせました。そういう恐ろしい記憶がありありと残っている時に、「民をして戦慄せしむ（民衆を怖がらせるには、栗を思い出させるがいいですよ）」という言い方をするのはよくない、言い過ぎだと孔子が諌めたのです。

ここの部分は、暗に、哀公もおやりになっては如何ですかと宰我が勧めているのを感じたので、孔子が止めなさいと言ったわけです。

これは、中国で国民が何か問題を起こすと即、天安門を想起するようなことをさせてはならないと考えればよいでしょう。新聞に出ていた話ですが、中国に旅行した人が天安門に関する話を言い出した途端にテレビの電源が落ちたそうです。再びテレビの画面が映った時には、もう天安門の話は終わっていた。情報操作で、天安門に関するものは一般の人には流さないように徹底しているようです。